

ここはガーデンコートという、テムズ河畔の古い由緒ある壮大な邸宅の広い庭である。3人の男がお茶を飲みながら楽しそうに話している。ひとりはこの邸宅の主、タチェット氏 (Mr. Touchett)、アメリカ生まれであるが、イギリスで銀行家として成功し、今は引退している。ひとりはその息子で、病身のラルフ (Ralph Touchett)、もうひとり、その友人の若い貴族ウォーバートン卿 (Lord Warburton) である。3人の会話の中に、ラルフは母の電報のことを持ち出す。母はいまアメリカに行っているが、気まぐれな人で便りを全くよこさず、1通の電報が届いただけ、意味不明の語があると、その電文を被露する。去年亡くなった妹の娘を連れて帰る、とあってそのあと、**"independent" (26)¹⁾**とある。この「独立」とはどのような意味なのか。金に困らないということか、人の世話は受けないということか、自由に生きるということか、あれこれ話していると、小犬がほえて走って行った。その方向を眺めやると、ひとりの若い女性がその小犬を抱いて、庭に面した家のそばに立っている。こういう風にして、ヒロイン、イザベル (Isabel Archer) が、何気ない会話の中から、「独立」を愛するアメリカの若い女性として姿をあらわす。

ウォーバートン卿は知的で良心的で進歩的な青年貴族である。彼は澁刺として聡明で美しいイザベルにつよくひかれ、結婚を申し込む。客観的に見ればまさに理想的な求婚である。しかしイザベルはウォーバートン卿に強くひかれながらもこれを断る。彼と結婚すればお城に住む華やかで安泰な一生が保証される。しかしイギリス貴族の生活はつよい伝統にしばられている。ウォーバートンはそういう伝統に批判的ではあるが、それを

改めるのは難しい。彼と結婚すればずっと先までも見通される安全な軌道の上を生きることになる。

"I should try to escape it if I were to marry you." (118)

"It's getting--getting--getting a great deal. But it's giving up other chances." (118)

これが「すばらしく安穏な生活」を約束された結婚を拒否するイザベルの理由である。

もう1人、イザベルを深く愛しているアメリカの青年実業家グッドウッド (Caspar Goodwood) がいる。イザベルの後を追って、イギリスに来て、烈しくイザベルに求婚する。しかしイザベルは彼の固い一本気な性格に、人生の深いリズムに合う柔軟性が欠けているような気がする。私とあなたとは軌道がちがうと言う。

"If you were in the same place I should feel you were watching me, and I don't like that--I like my liberty too much." (142)

"Who would wish less to curtail your liberty than I?" (142)

"I wish to choose my fate and know something of human affairs beyond what other people think it compatible with propriety to tell me." (143)

イザベルの自由とはグッドウッドの受けとめているような19世紀的自由主義者の常識としての自由とはちがい、もっと深刻な、もっとだいそれたものである。

イザベルの親友、アメリカの女性新聞記者ストックポール (Henrietta Stackpole) は、そういうイザベルを心配して、(中略)

イザベルがイギリスへ行くことを知ったパンジー (Pansy Osmond) は不安だった。

"Perhaps you won't come back?"

"Perhaps not. I can't tell."

"Ah, Mrs. Osmond, you won't leave me!"

"What are you afraid of?"

"Of papa--a little. And of Madame Merle."

"I won't desert you,"

"I don't like Madame Merle!"

"You must never say that--that you don't like Madame Merle. "

"You'll come back?"

イザベルはその声がのちのち忘れられなかった。

"Yes--I'll come back." (462-463)

ラルフの臨終の場面は哀切である。マール夫人からきいたこと、伯父が与えてくれたと思っていた財産は、じつはラルフのお蔭だ、ということは本当なのですか、ときくと、ラルフは

"I believe I ruined you," (478)

と嘆くが、

"I don't believe that such a generous mistake as yours can hurt you for more than a little." (479)

と慰め、

"You've been like an angel beside my bed. You know they talk about the angel of death. It's the most beautiful of all. You've been like that; as if you were waiting for me."

"What have I done for you--what can I do to-day? I would die if you could live." "You won't lose me--you'll keep me. Keep me in your heart; I shall be nearer to you than I've ever been. Dear Isabel, life is better; for in life there's love. Death is good--but there's no love." (477)

という。

イザベルの不幸な結婚生活を知って、アメリカから駆けつけてきたがグッドウッドは、裏切りの家に戻らないで、自分と結婚しようと烈しく迫る

が、イザベルはそれを振り切って牢獄の家、パンジーの待つ家へと戻って行く。

友人のストックポールもきてイザベルに離婚をすすめるが、

"it seems to me I shall always be ashamed. One must accept one's deeds. I married him before all the world; I was perfectly free; it was impossible to do anything more deliberate. One can't change that way," (407)

と答えるのである。

マール夫人 (Madame Merle) は失意のうちにアメリカに去り、オズモンド (Gilbert Osmond) も幸せではない。愛した人も、愛することのなかった人もいちように不幸である。

終わったものがあるとすれば、それはイザベルの自由への幻想である。ジェイムズが描かんとしたものが、そのような幻想にもとづく罪と罰の物語であるとすれば、この物語はまさに終るべき所で終わったといえる。

作者は *The Notebooks* でこう言っている。

With strong handling it seems to me that it may all be very true, very powerful, very touching. The obvious criticism of course will be that it is not finished--that I have not seen the heroine to the end of her situation--that I have left her *en l'air*--This is both true and false. The *whole* of anything is never told; you can only take what groups together. What I have done has that unity--it groups together. It is complete in itself--and the rest may be taken up or not, later. (628)

参考文献

1) Henry James, *The Portrait of a Lady*, ed. Robert D. Bamberg, A Norton Critical Edition (New York and London: W. W. Norton and Company, 1975) 26. これ以後、James の小説の引用は全てこの版に依る。

